

6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

415
10

東大震書一

東京新聞社



書



始

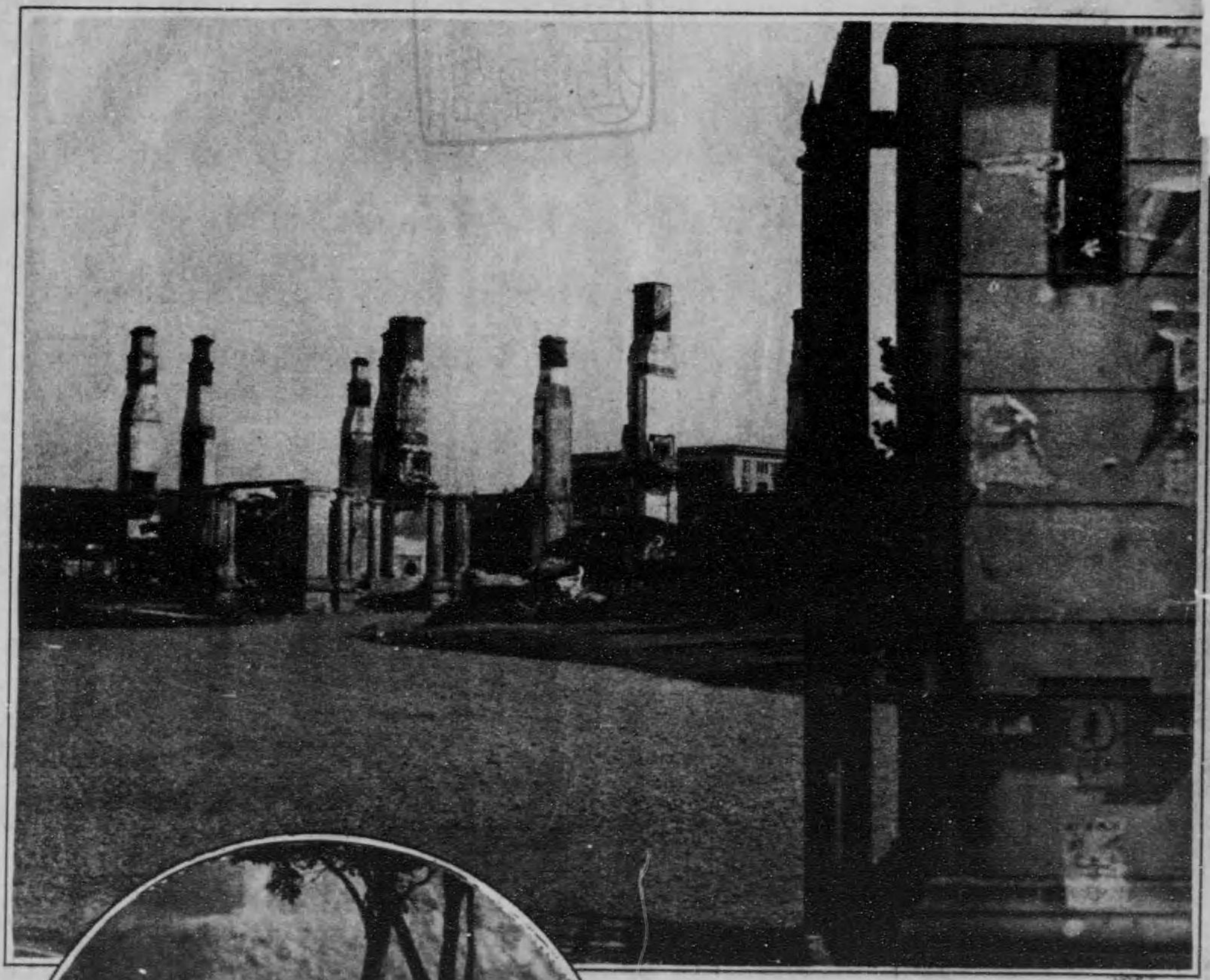


48-10
420-70

大正十二年十月十日
第一頁六千〇〇三號

關東大震災畫報

昭和二年九月八日
第三號



第一圖と共に火を致し
大穴を開かした所
は其の破損上は
にくつ折れた丸柱
川原二重子の銅像也

發行所寄贈本

大正
12.10.12
寄贈

東京日日新聞



非難に守らるゝ大蔵省建物の遺構



震災の戦後米交



は勝を粗衣のへ民災罹らかづ手お
下蔵王頼内子帯記高瀬久東よ給せ



日頃の恩徳も忘れて



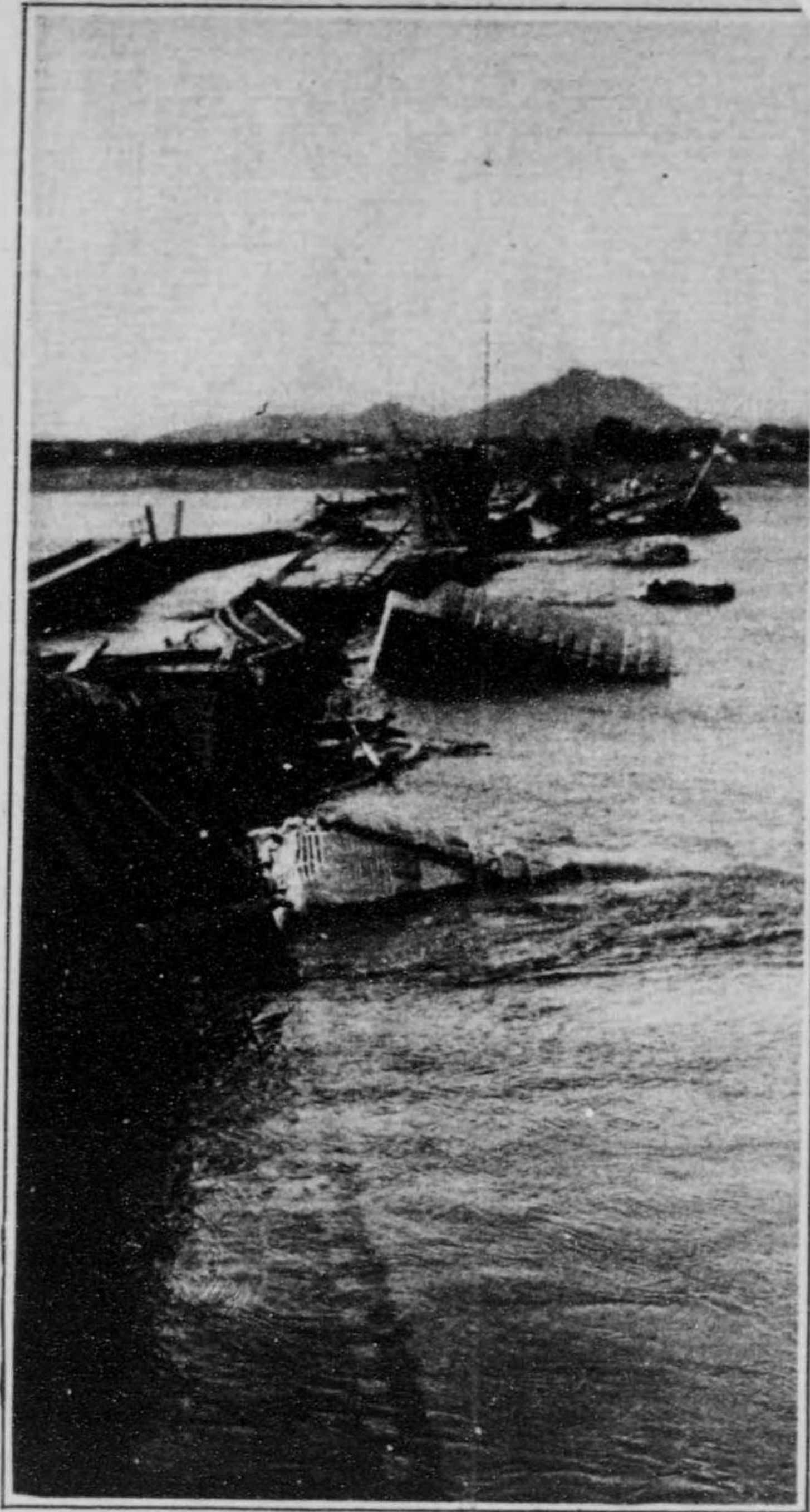
佛大の野上たしくなを首



和田倉門前の大亀裂



日比谷附近に火の手上る



被災茶客にたつ馬入の川原

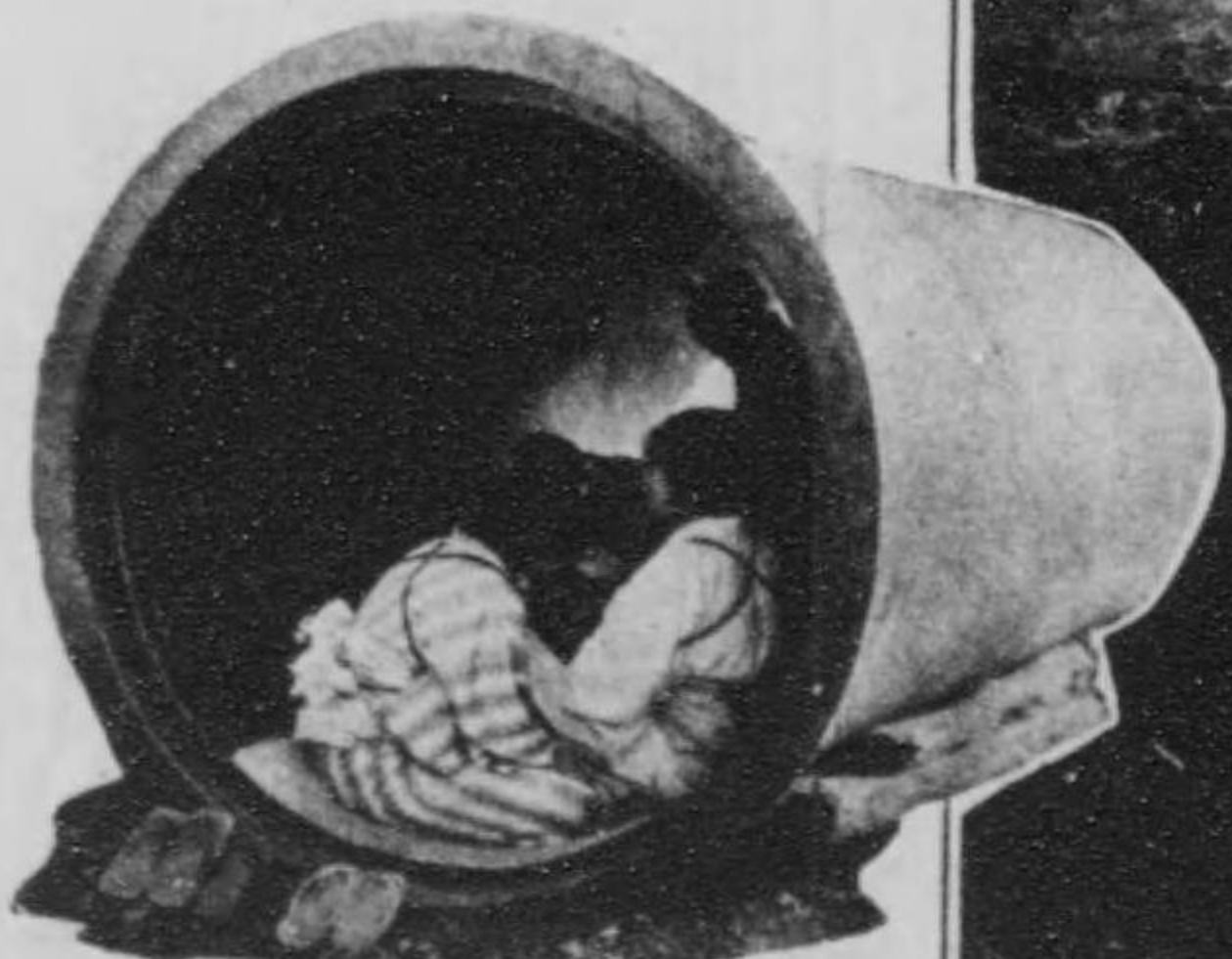
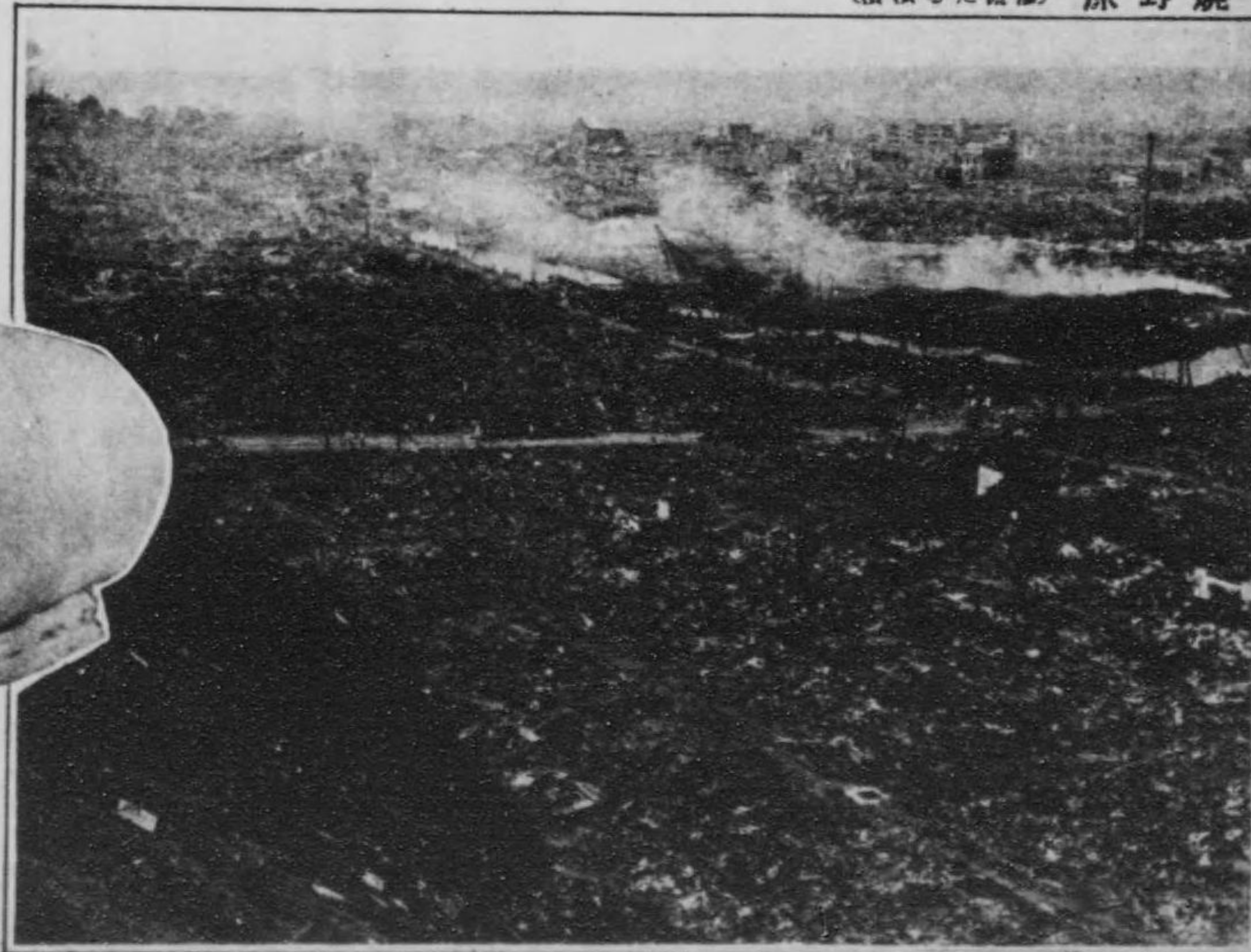


佛も残らぬ潰壊の標

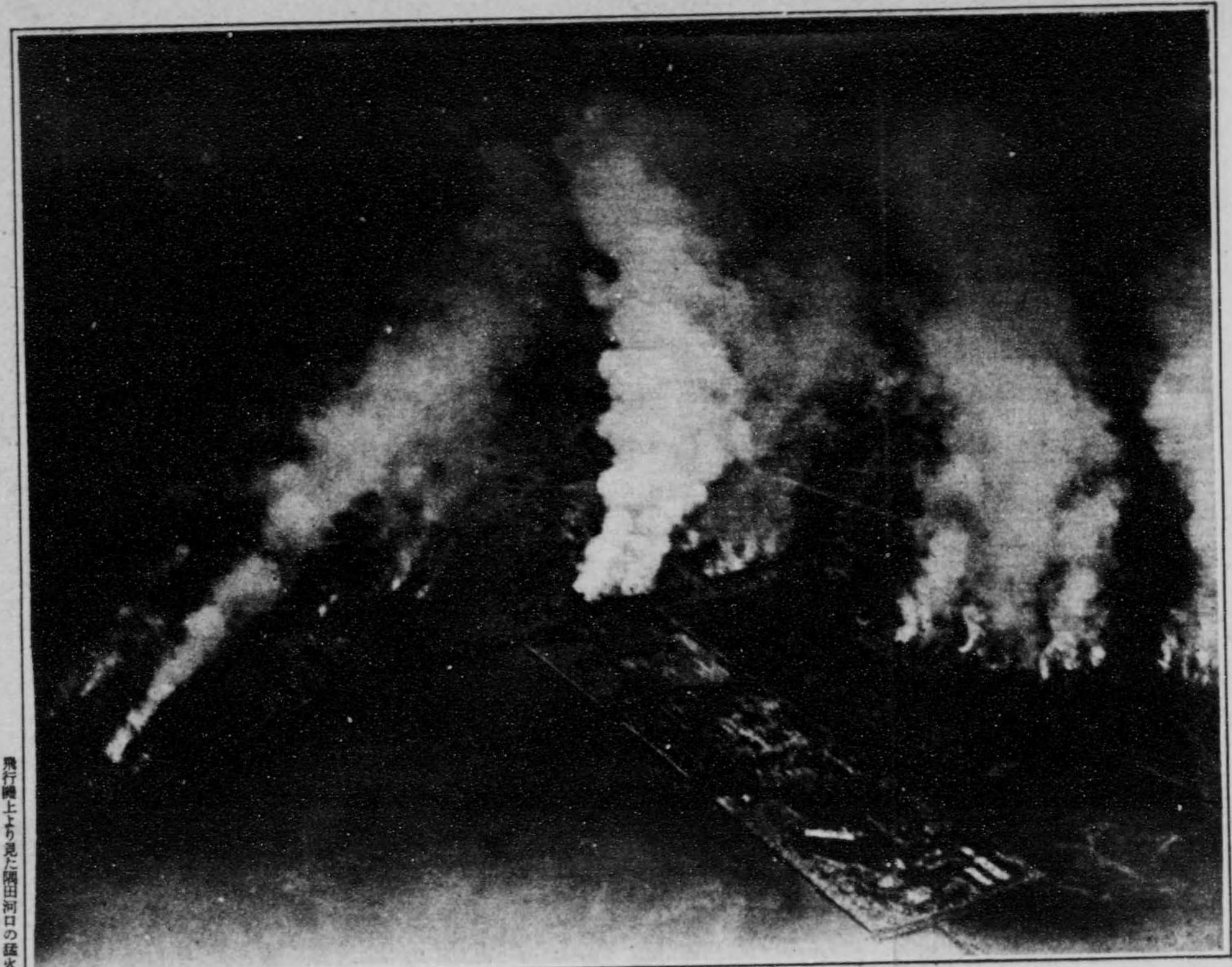


福をかきすか合乗馬車

原野焼 (焼けた標) 原野

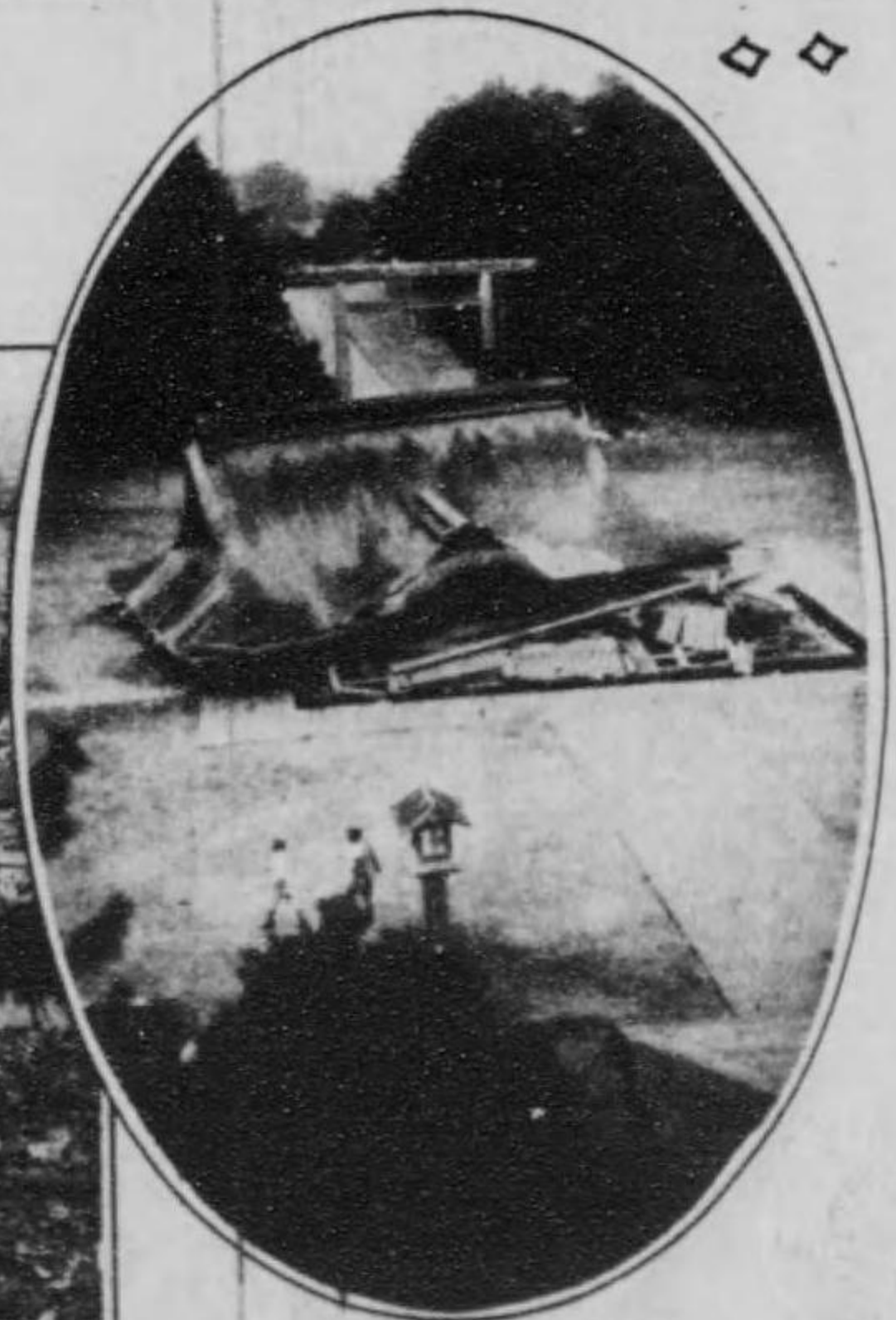


管を管に家みす

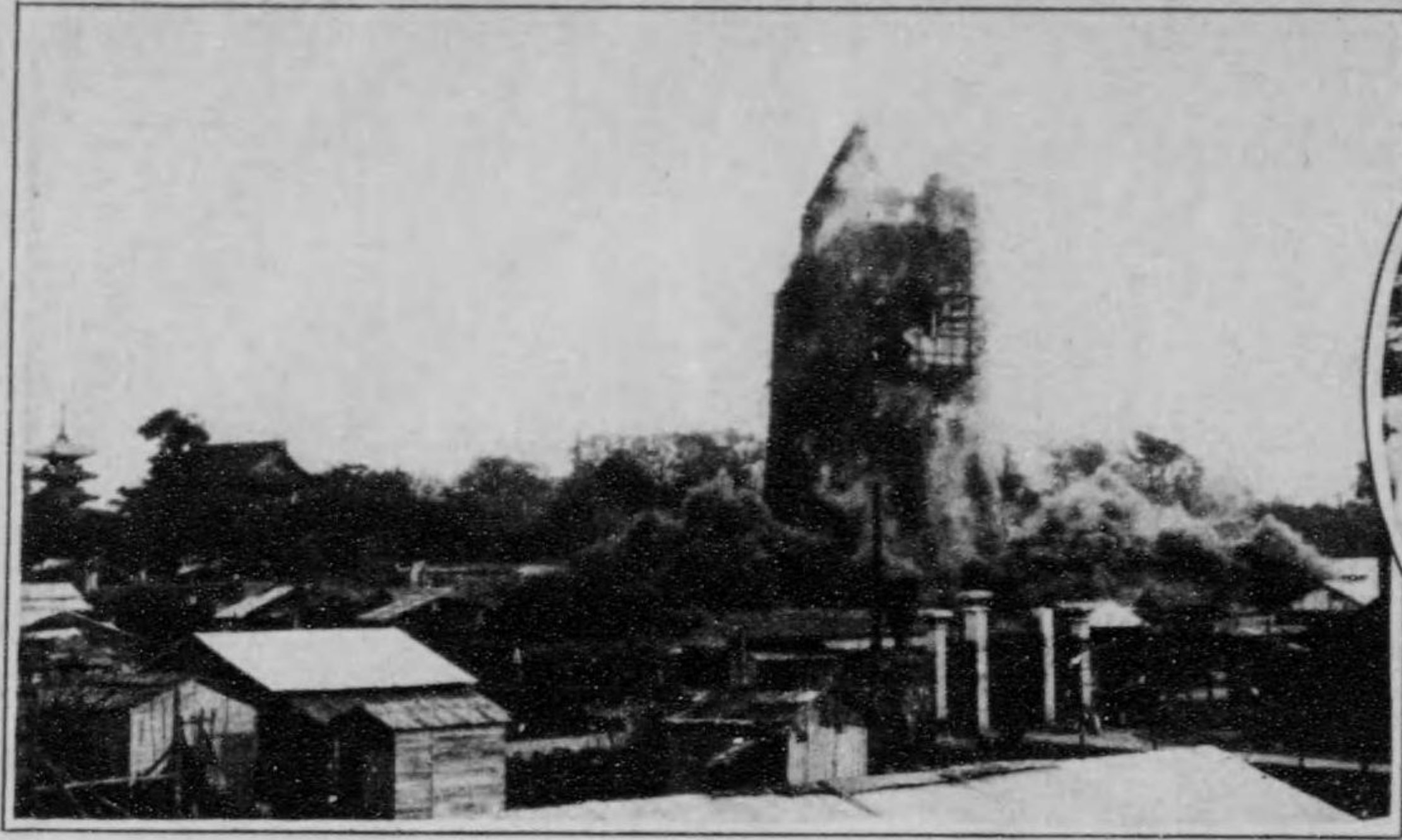


火柱の煙田田河上より上

見渡す限り



例焼た八幡宮の拜殿



失はれた土蔵 右は地盤のため八
階から倒れたところ、左は復設の計画



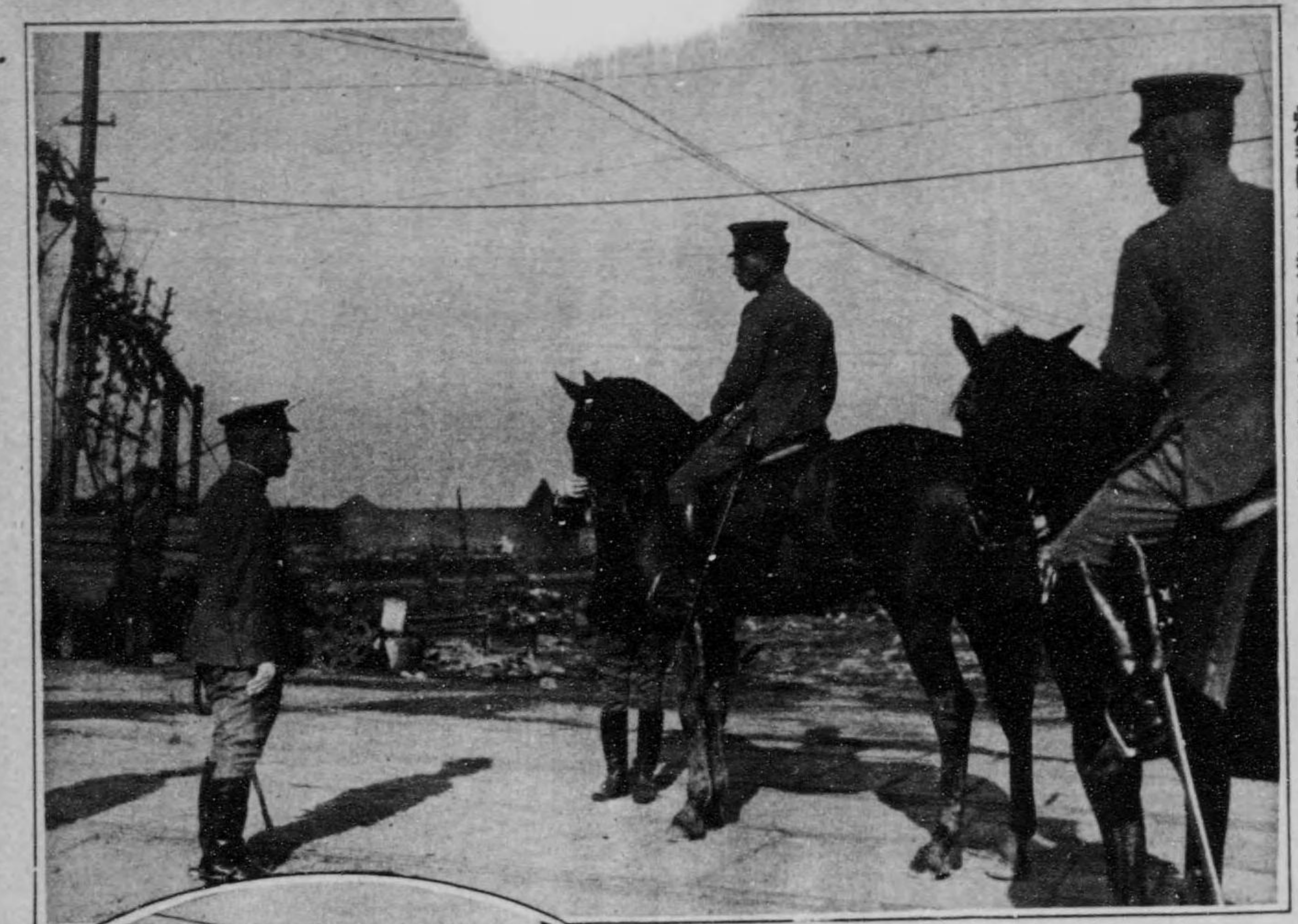
罹災者の有様 海軍軍需部



浴水の崩れ 追跡者



伊豆伊東の惨害



焼野に馬を進め給ふ攝政宮殿下

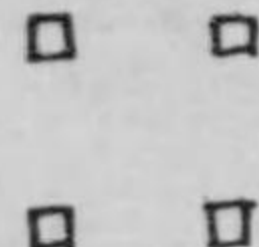
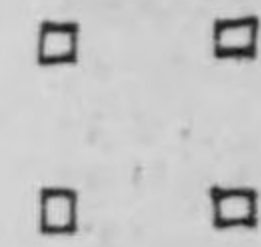


見ることがない、遠く仲見世上と
御利益あらたかに懐懐つた御世曾下

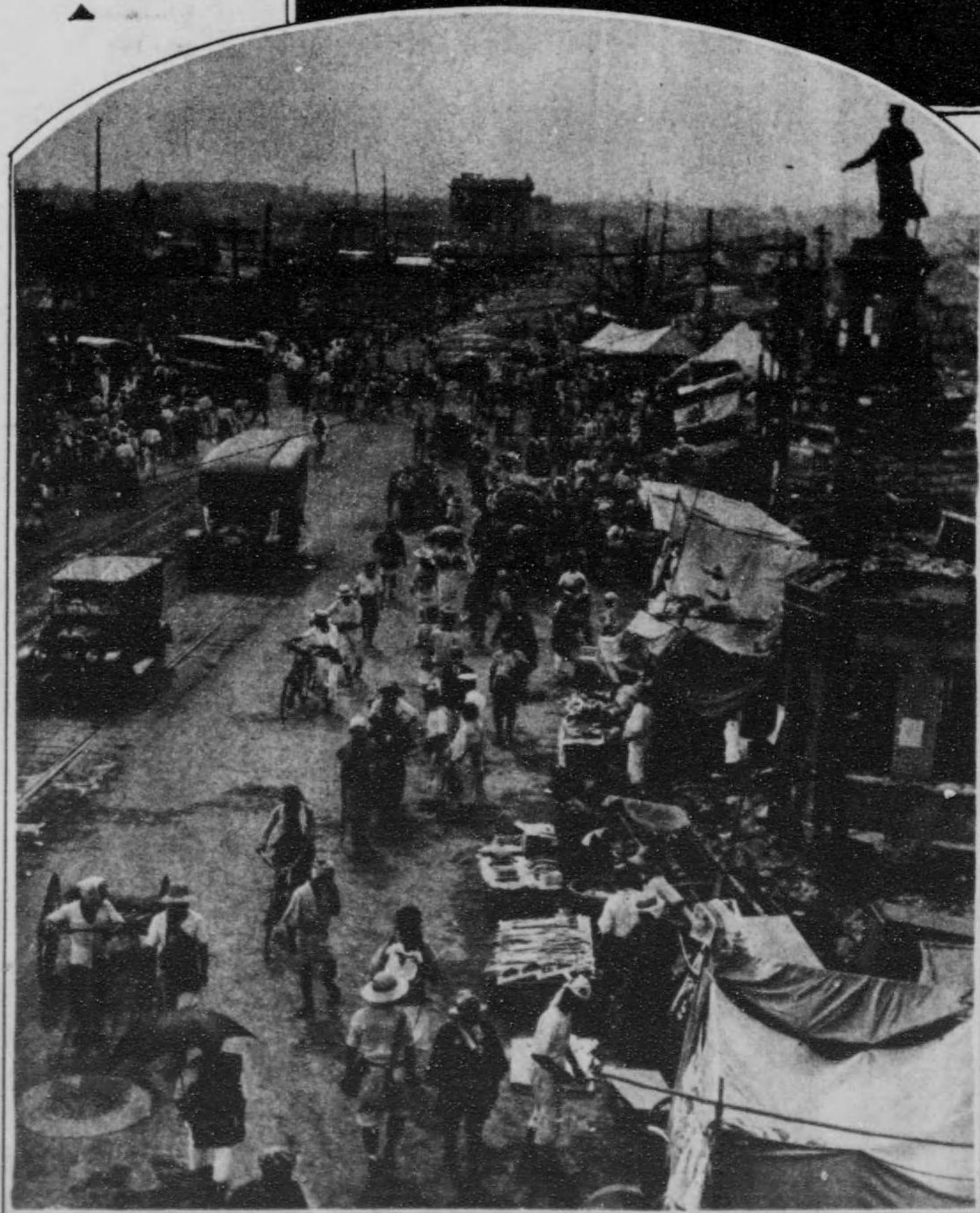


軍工部隊の職兵工





焼つけ、あゝ帝劇と警視廳



相模原市田原近



民衆に逃げ逃して

日頃つての政變に手を焼いて居た西郷どん！
今度は被災者救済の消息塔で附き出すのころ早く貼り、さすかの準備も無いらしい。

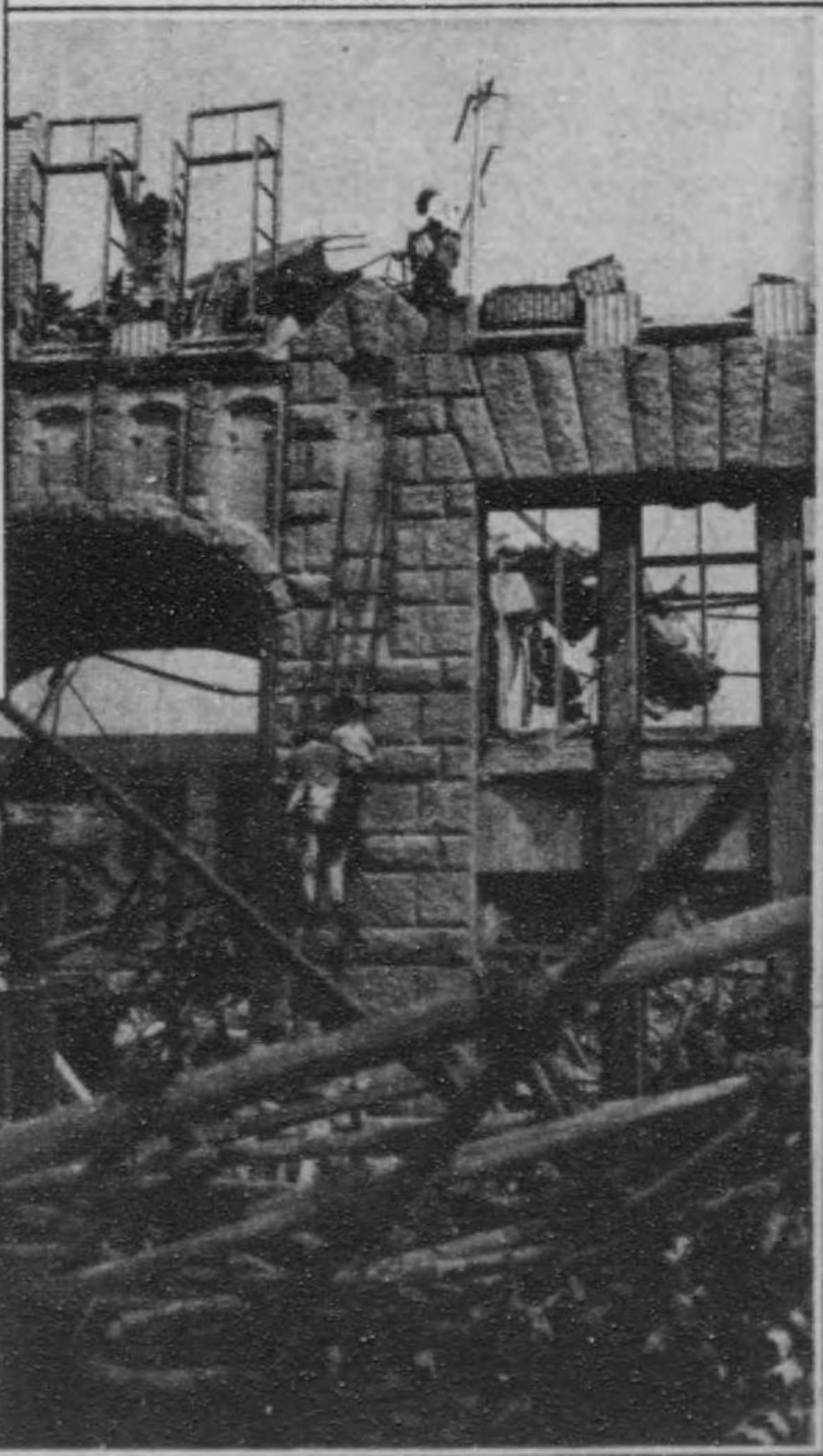


訪土富の崎川たし出を者死の名百數

崩壊のやうな銅像

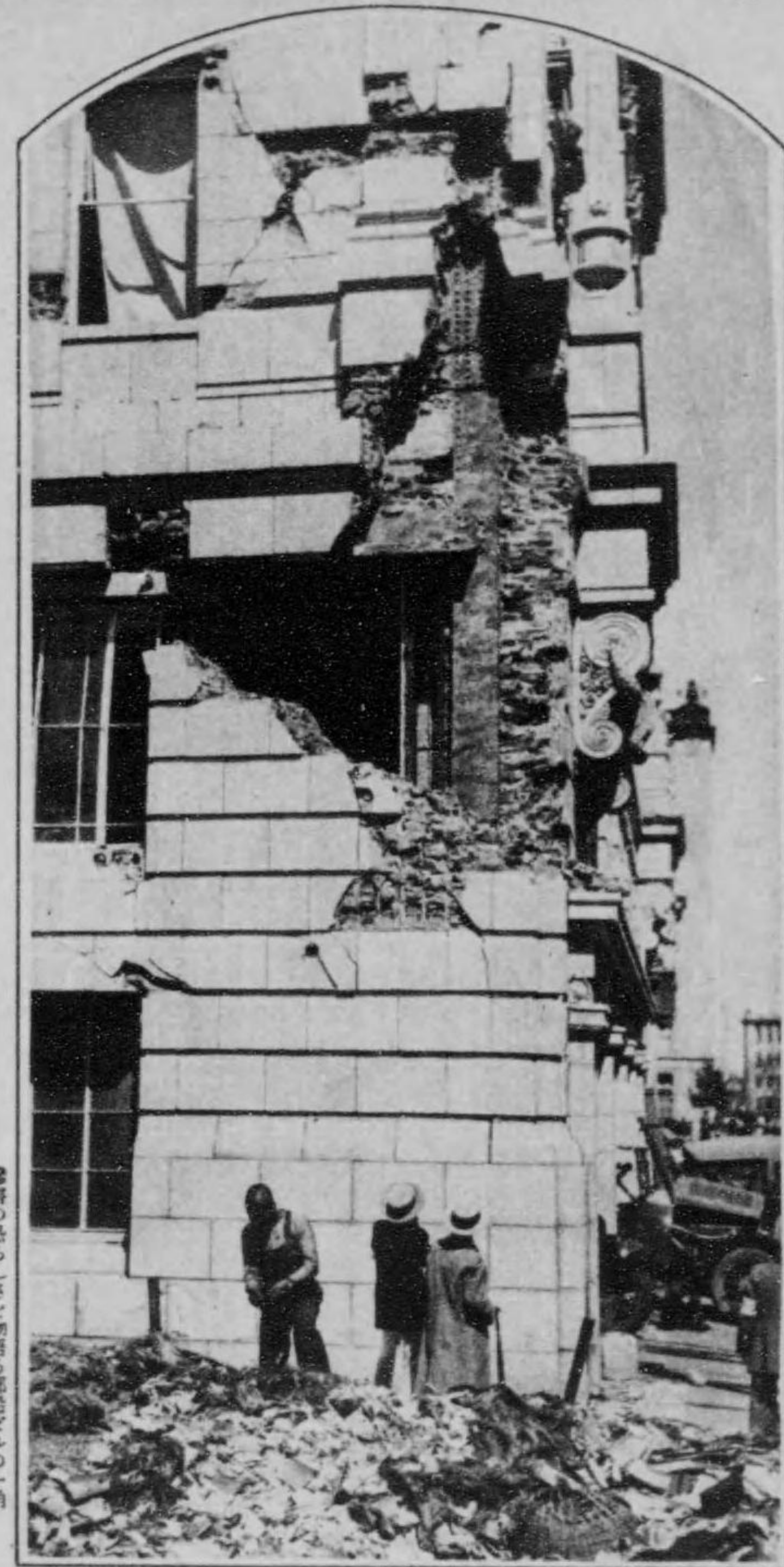
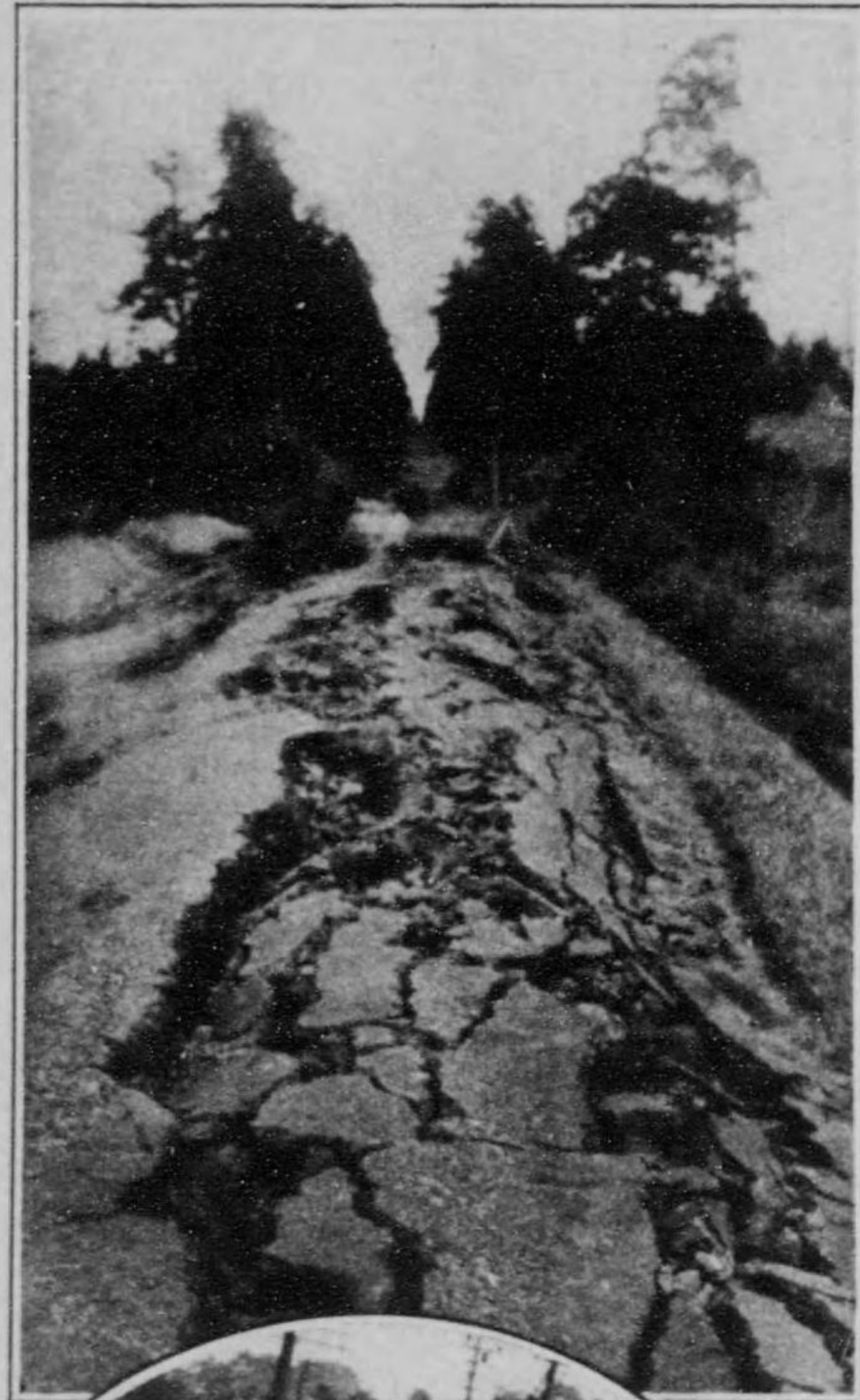


ダンヂルピ外内の内の丸敷ま溝もけつ片取の部死にた末



從付野山十寮観を害震の山麓

れは地大の近附場殿御



修繕の恐ろしさを物語る邸宅ビルの一隅



町原田小

震の湖中に倒壊した富士見ホテル(前掲)





列車の風景



平塚の現状



廻り果てた日本橋附近



左○原吉と右崎村たし化と土庫のり通宇文



野原の邸用山山葉



誰のものとも判じ得ぬ骨の山、それは数々の焼死者を出した大所野原の跡の光景だ。せめても心やりか門前にはなまを蒸ふ遺族の群で市をなせばお坊サンが手廻きもあざやかに例ばかりで骨の山を崩して行く、まるで再建小説にでもありさうな場面だ



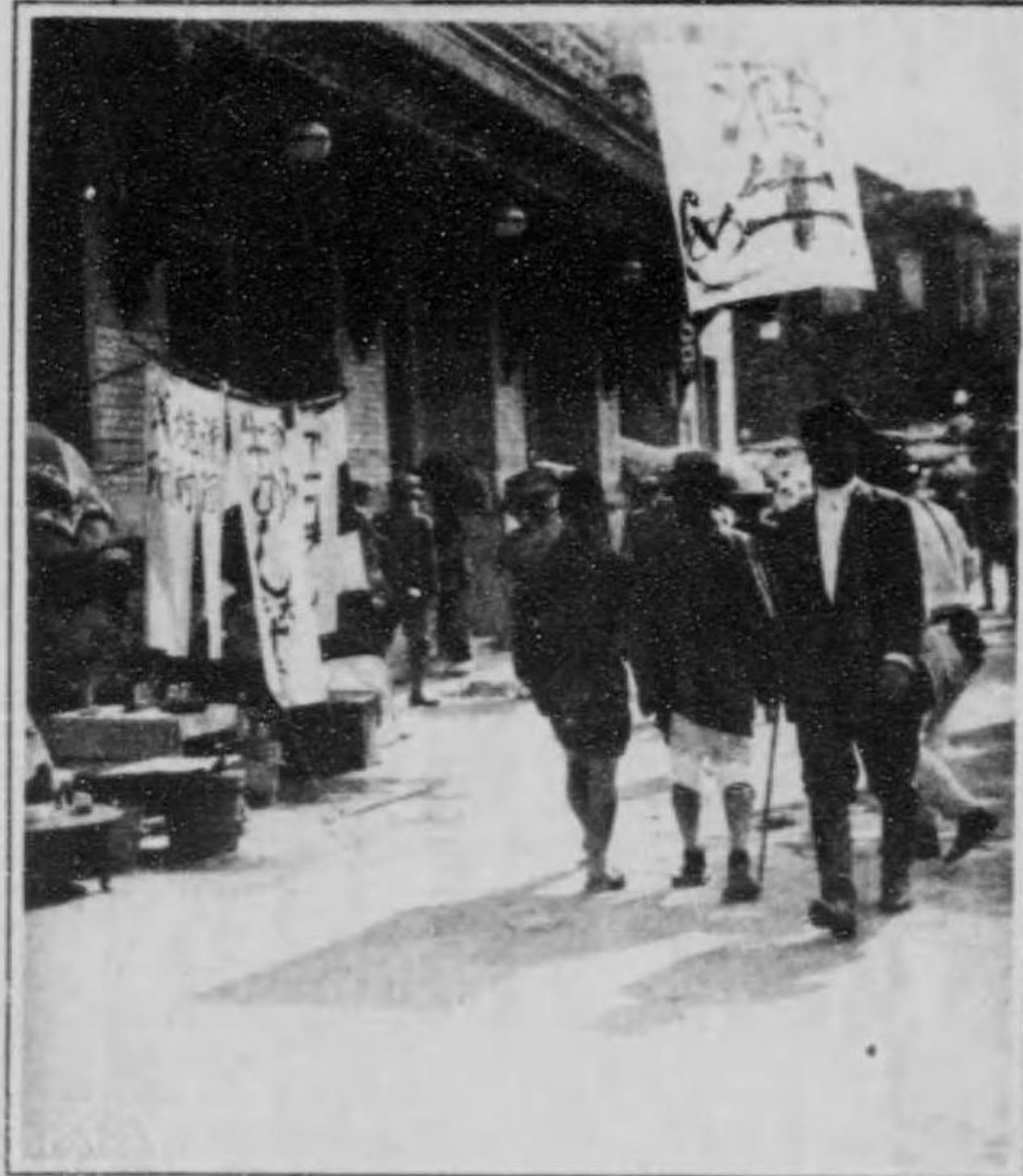
重傷者を安全地帯へ



整理者を争う十八(大宮停車場の混雑)



山と積まれた芝浦の高貴品



牛めし屋に身を落した密勤



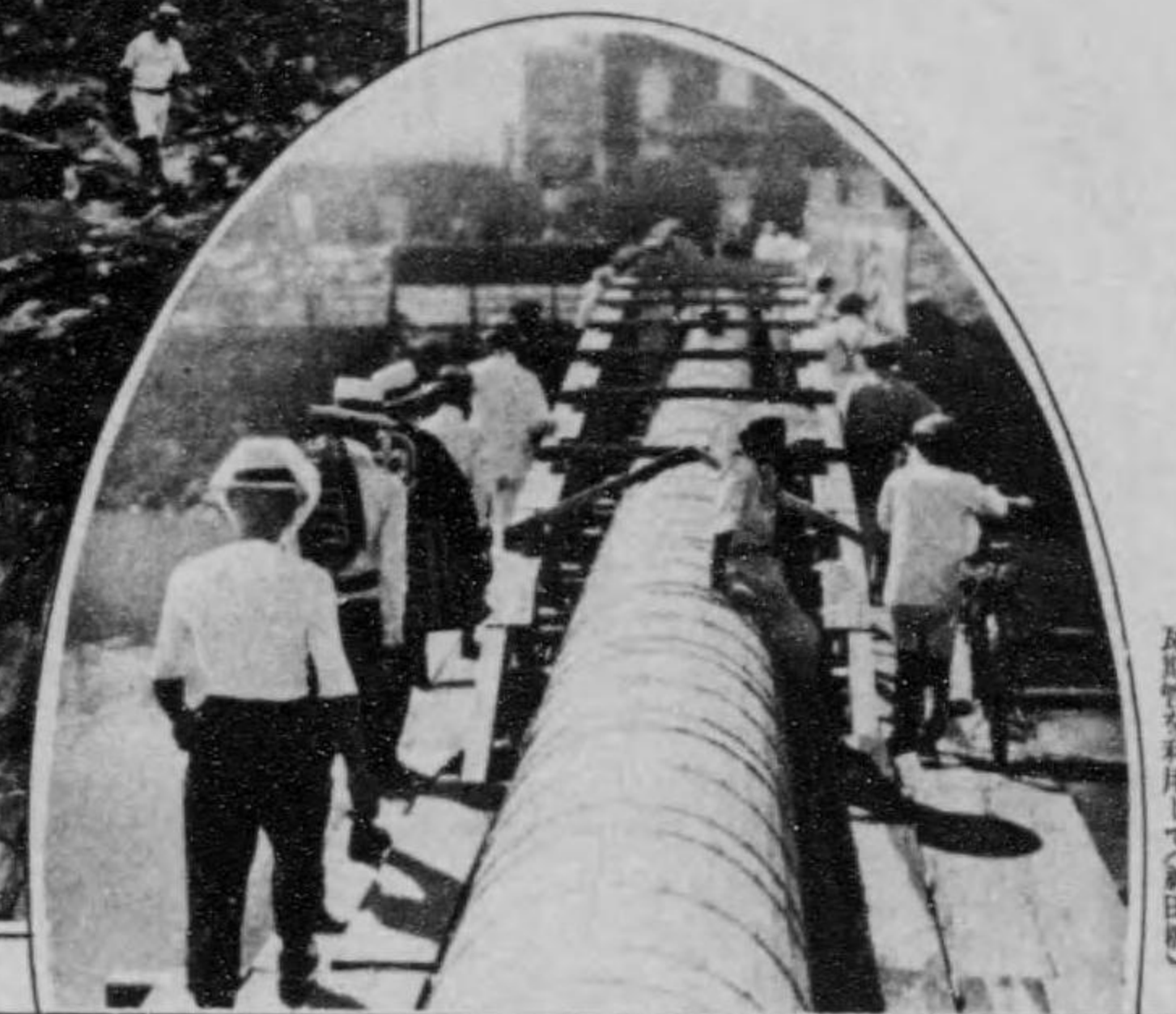
別れちりし夫や子供に
さちあれと祈願する避難民



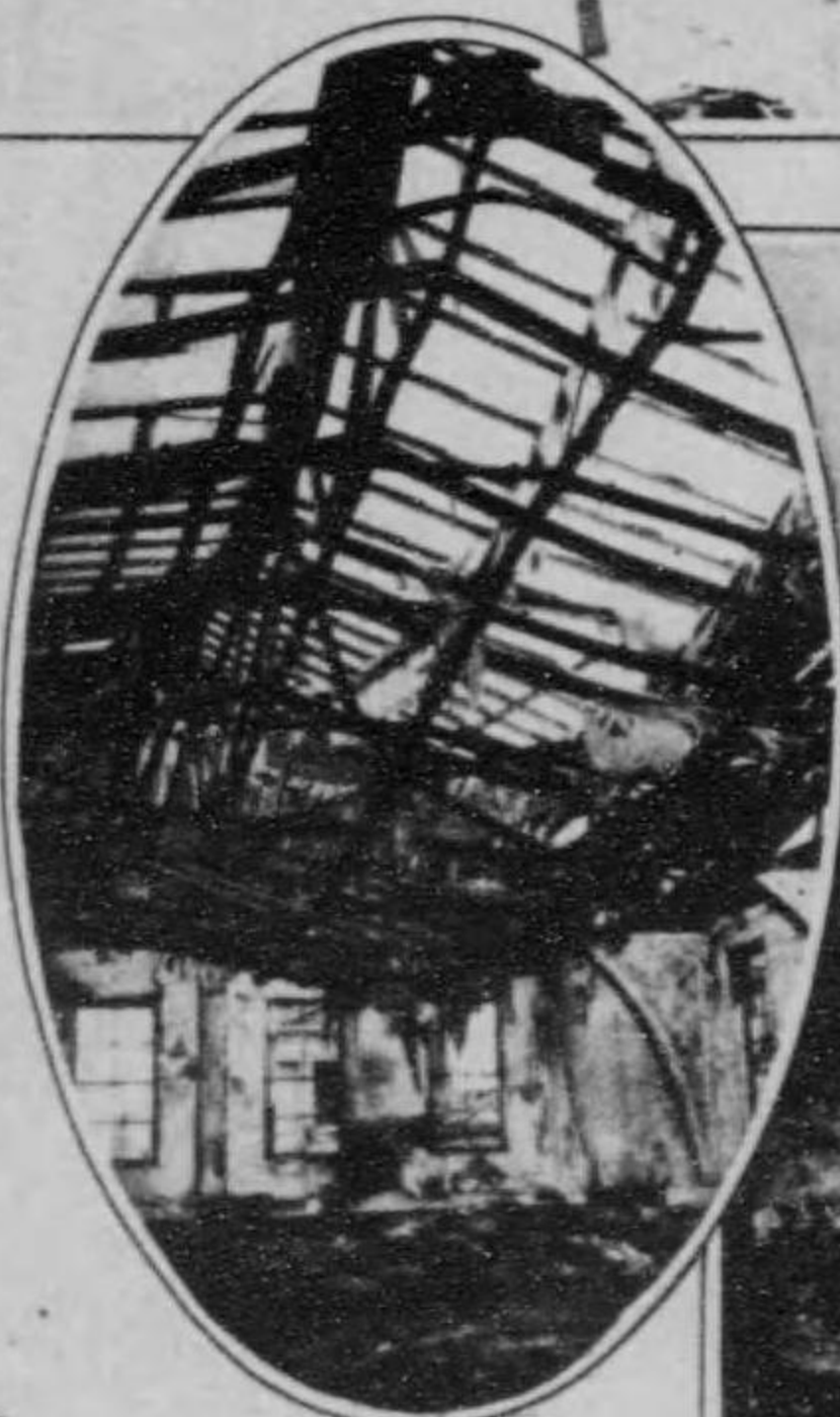
日と夜のバラック生活



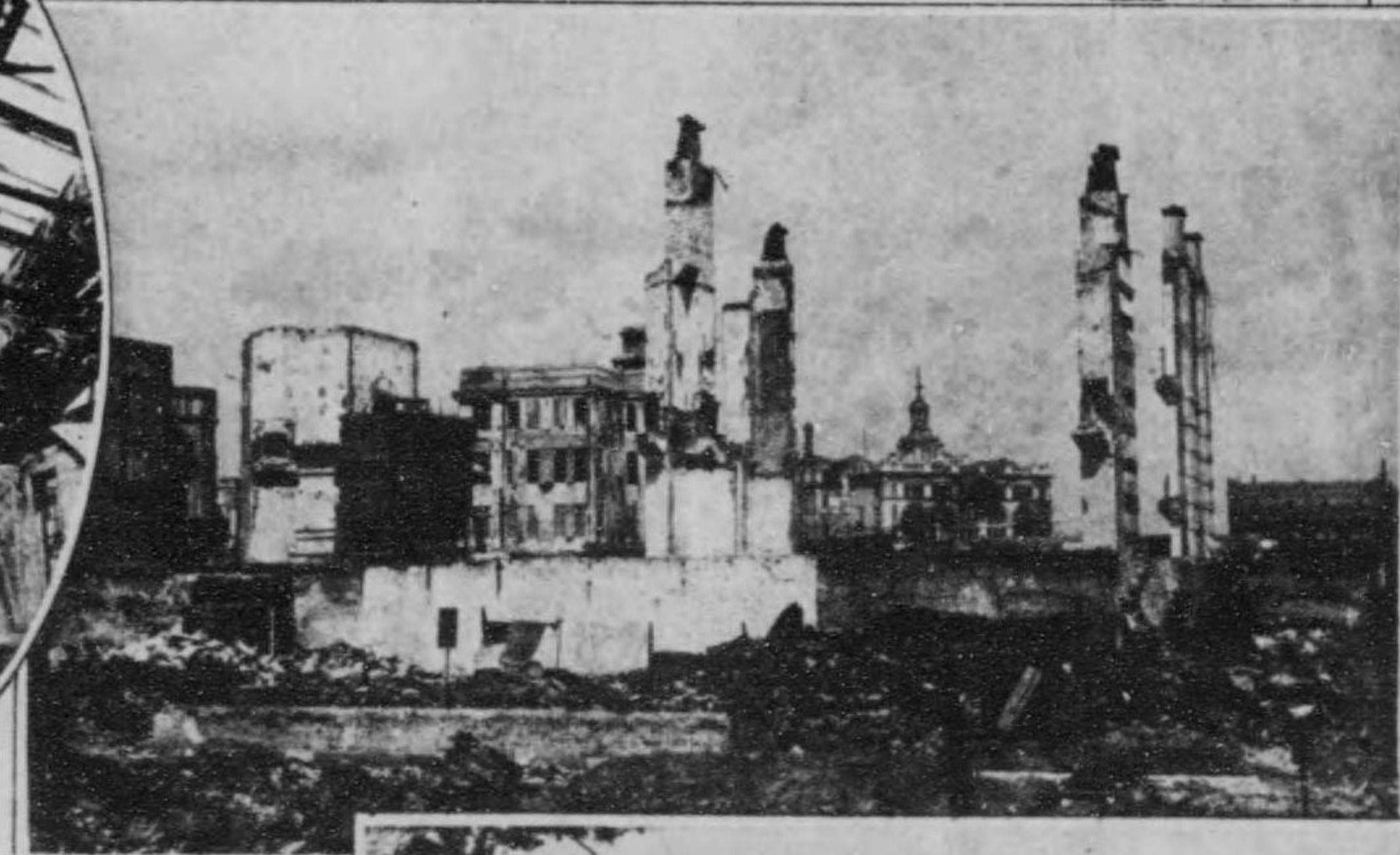
種彦館から見た国政府館



瓦管を利用して(新田町)



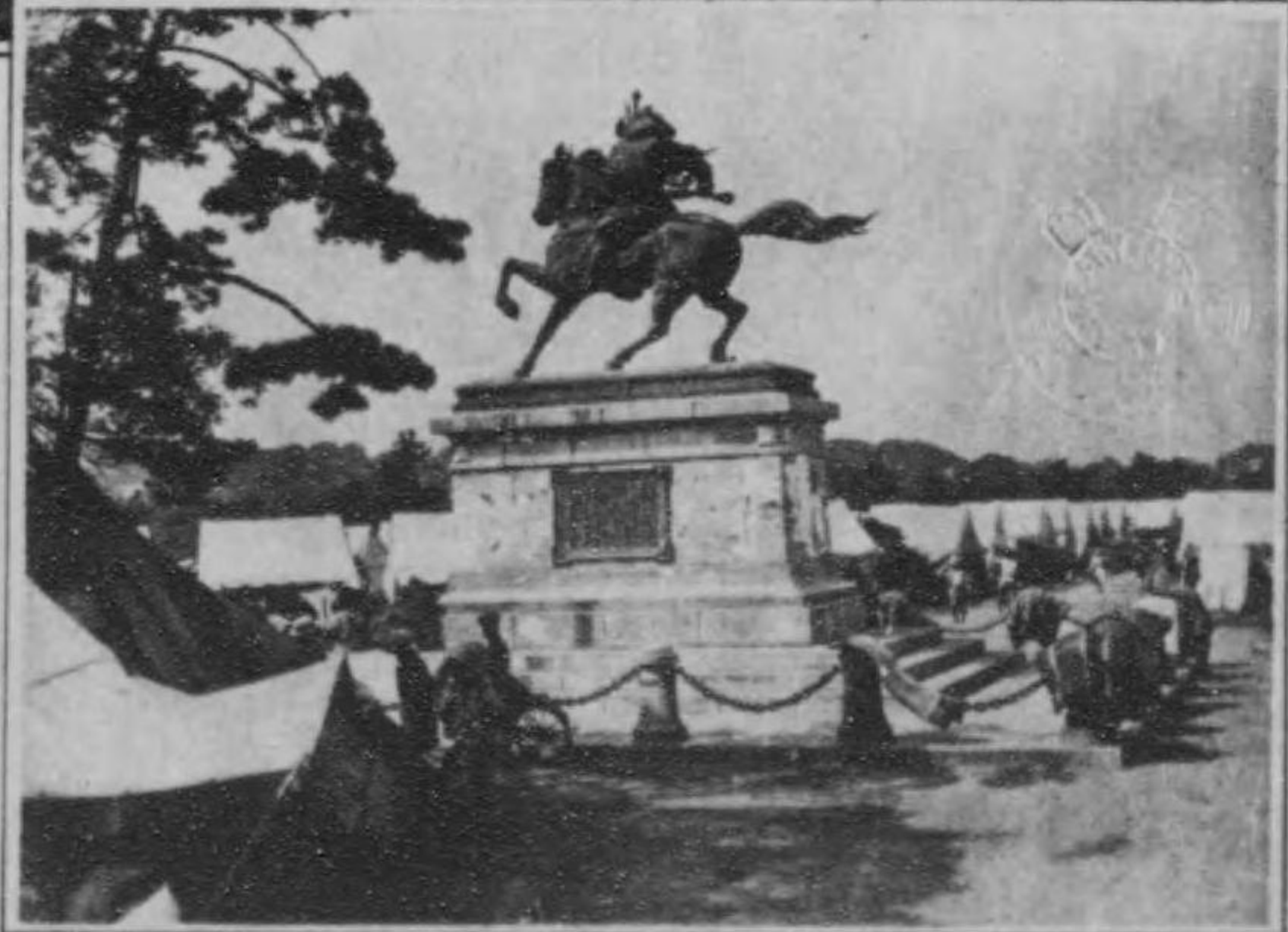
まるで船組工三越ギヤラリーの残骨(前子)



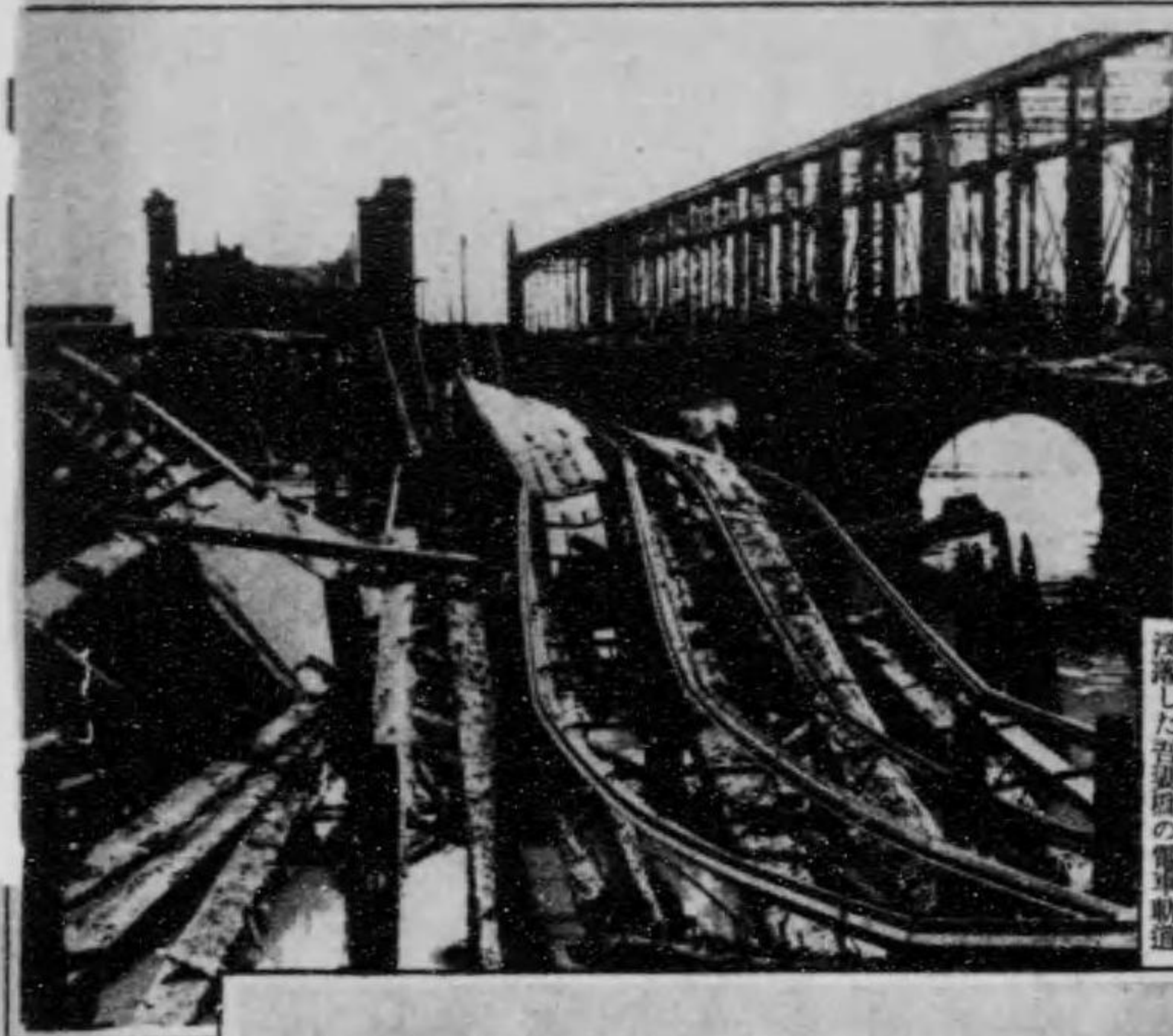
外見だけは立派に見える二層の遺塔



寺持見刺



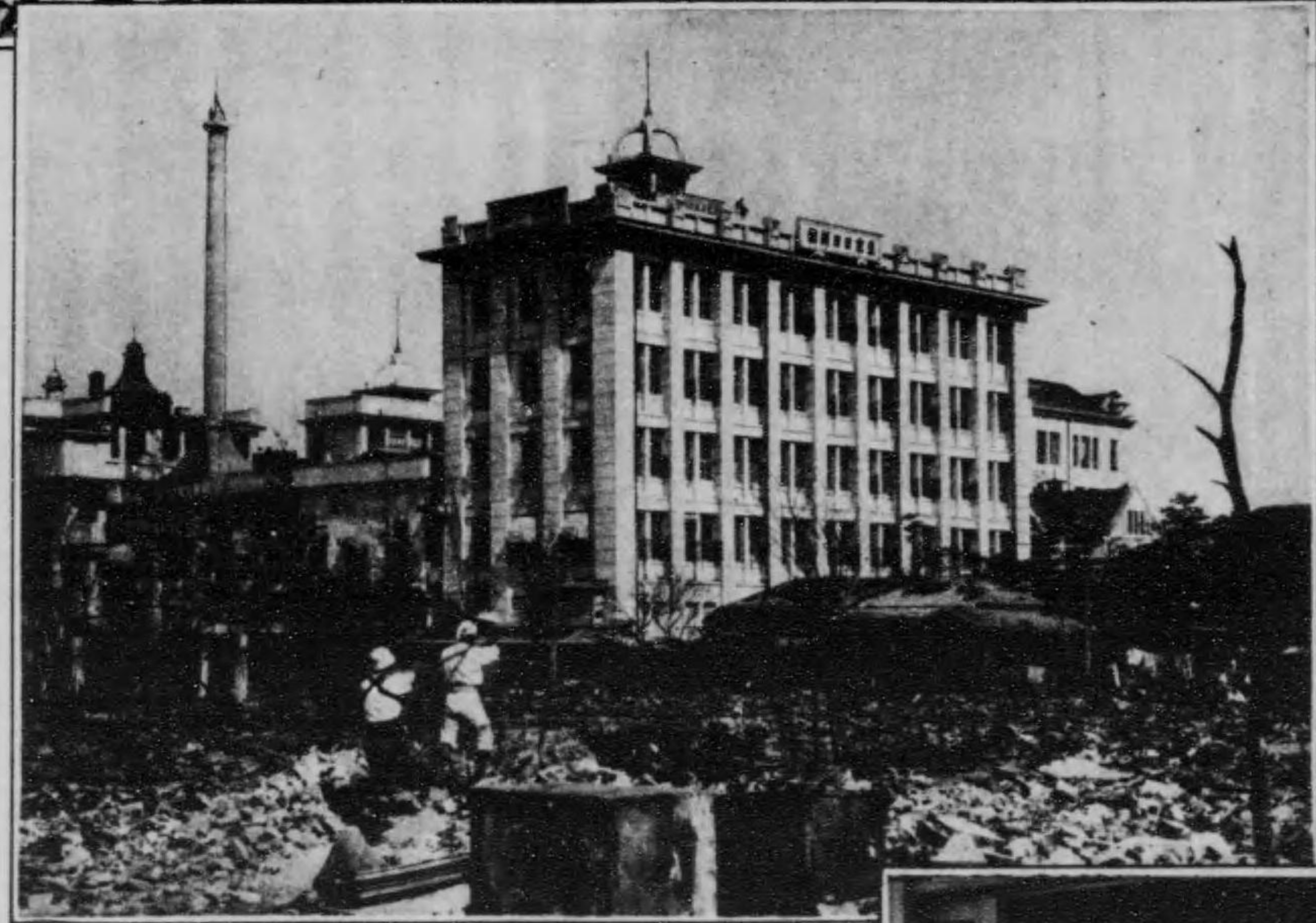
公騎たれさに墓干物



没落した青森線の電車軌道

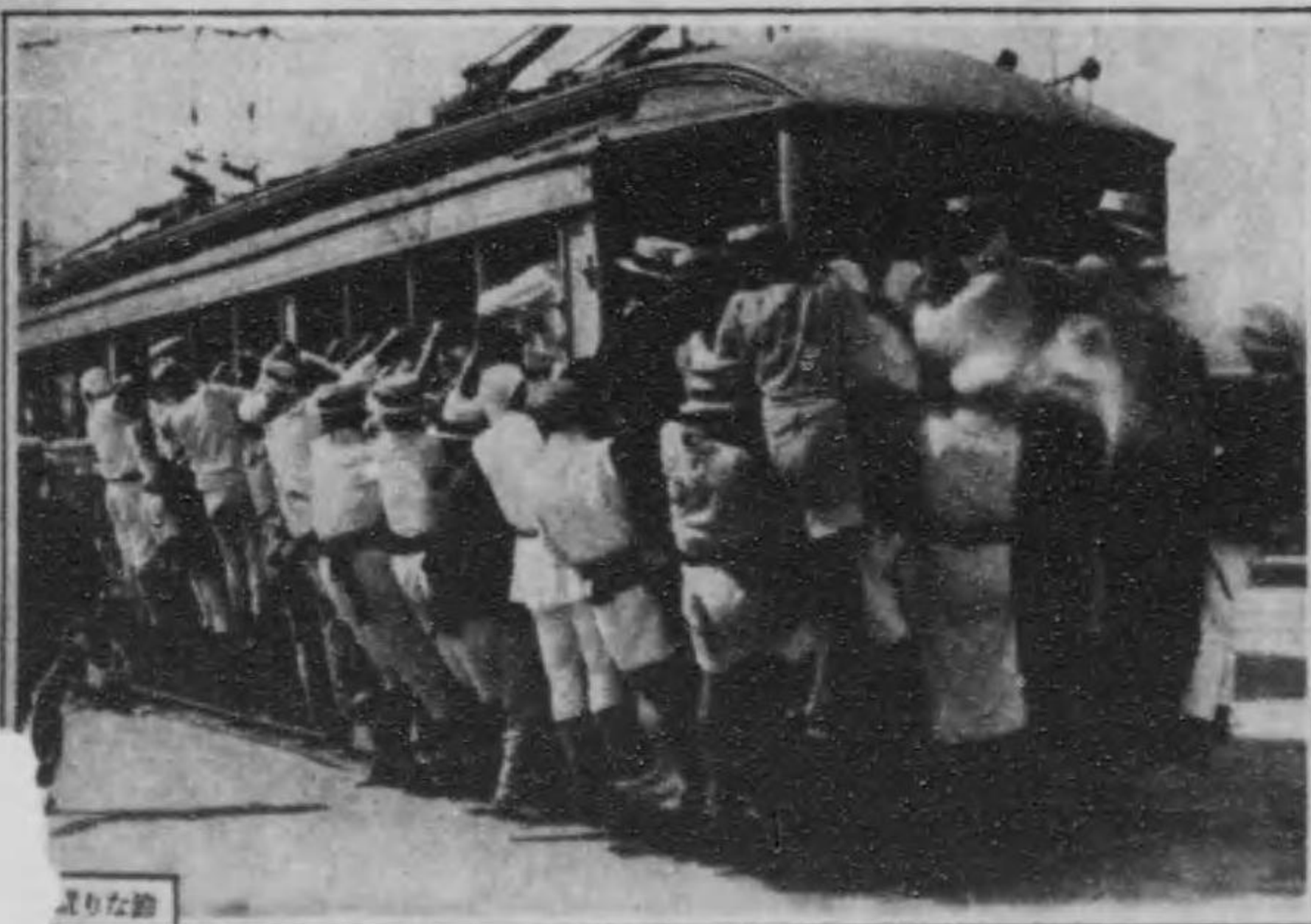


近附横東江—水に後の火



幸に震害火難を免がれた本社

銀行所 東京銀行町二丁目 昭和 株式會社 日本郵船株式會社 東京日本郵船株式會社 昭和



足りた船



常任役員會初顔合せ(右より加藤 政司 伊東巴代 藤田一子)

終

